

について見て来た。武装表現については、『今昔物語集』が異質という気がする。又、武装を詳しく描いた場面を見ると、『承久記』と半井本『保元物語』が一場面に限られているのに対して、第一類本『平治物語』と屋代本『平家物語』は数場面あって、華やかになっている。第一類本『平治物語』と屋代本『平家物語』は、出て来る武具や絵画の使い方にも共通点があるように思われるが、この点については、稿を改めて、又調べてみたい。

(注一) 『軍記物語の生成と表現』(平成七年三月)。

(注二) 早く、駒田貞夫氏が『今昔物語』から『保元物語』へ―合戦装束描写にみる変質と発展―で引用部を含む描写を採り上げ、『今昔物語集』の維茂一人を対象とする作品世界の本質を指摘している。

(注三) 「後三年合戦絵巻」『大和繪と戦記物語』昭和四四年三月。

(注四) 鈴木敬三氏「平家物語に見える武装の描写」(『國學院雜誌』昭和五〇年十一月)。

(注五) 弓削繁氏『内閣文庫蔵六代勝事記』(昭和五九年四月)の「解説」によった。

(注六) 『鎌倉時代文學新論』(大正一一年一二月)の六代勝事記の章。

(注七) 杉山次子氏「慈光寺本承久記成立私考(一)―四部合戦状本として―」(『軍記と語り物』昭和四五年四月)。

(注八) 注三の桜井氏の「残忍性の表現」という言葉が思い出される。

(注九) 山下宏明氏に、太平記の特徴として太刀の長さを明示する例が多く

なる傾向があるという指摘がある(「武者所の輩存知すべき条々―軍記物語における様式―」『松村博教授定年退官記念国語国文学論集』昭和四八年四月)。

(注一〇) 山下氏の前注の論文に、覚一本と比較して記されている。

(平成十一年五月六日受理)

不被召 白キ御衣ヲソ召レケル」とある。又、白拍子の原初の姿は「水竿ニ立烏帽子白キ鞘巻」だったという。ところで、屋代本に登場する女性には超現実的なものが多い。熊野権現の使いかと思われる、船上の四、五人の女房は赤い袴を着けていた。又、剣巻に出て来る、鬼の化けた女房は「紅梅ノ上着ニカケ帯シテ守カケテ衣ノ袖コメニ御経持」ちたる姿である。そして、この鬼となった娘は「長ナル髪ヲ五分テ松ヤネヲヌリ巻上テ五ノ角ヲ作ケリ 面ニハ朱ヲサシ 身ニハ丹ヲヌリ 頭ニハ金輪ヲ頂テ 續松三把ニ火ヲ付テ中ヲ口ニクハヘ」て、夜道を走ったという。

屋代本には体付き等もよく記されている。いか目房祐慶の、半井本『保元物語』の為朝の背丈と同じ七尺ほどの高さ。禿の、赤い直垂と、禿なりの髪型。権帥季仲の「余リニ色黒」きこと。この色の黒さは、地方生活や憔悴と関係があるうか。鬼海島に取り残された俊寛は「カケロウナムトノ様ナル物ノ瘦黒ミタル」と有王に見られているし、重衡も「瘦黒ミタル」と大納言の典侍に見られている。一方、剣巻で、鬼の化けた女房は「膚ハ雪ノ如クニテ 実ニミメヨカリケリ」とある。

道具等に転じると、扇には「ツマニ月出シタリケル扇」と「皆紅ノ扇ノ日出シタル」の二つの絵柄が出て来る。いずれも極めて単純な絵柄である。天台座主の名は黄紙に記され、白い布で包まれて方一尺の箱の中に入っていたという。『平家物語』では未来記だが、現存する『天台座主記』のある時期が雛形とでもなっているのであろうか。康頼が流した卒都婆には「文字ヲ彫入レ、刻付」けてあったという。文字といえ、漆で名前を記して

ある矢もあった（前出）。内侍所の輝きは「光明赫耀トシテ朝ノ日ノ山ノ端ヨリ出サセ給ヘルニ不異」と形容されている。これも絵画的表現に入れて宜からう。

大きなもので、屋代本に出て来る牛車は八葉車である。成親の全盛期、熊野・天王寺詣では「二カハラノ三ムネ作ノ船」で淀川を下って行ったらしい。この成親が西八条邸に幽閉された時、その場所は「障子ノ上ニ蜘蛛結」うてあった。後白河法皇は、福原の「四面ニハタ板シテ口一ツアケタル所」に幽閉されたこともある。

自然に転じると、垣生の新八幡は「夏山ノ峰ノ緑ノ木間ヨリ緋ノ玉籬ホノ見テ 片曾木造ノ社」と写されている。寂光院の四囲は「翠黛ノ色紅葉ノ山、絵ニ書共筆モ難及」とある。この青赤の色の取り合わせは、「翠黛紅顔」「翠帳紅閨」といった漢語や「影浸南山青滉湯タリ 浪沈西日紅ニシテ淫淪タリ」という対句でも使われている。『六代勝事記』の表現を取り込んでいるので、色彩に富んだ表現が少なからずある。

屋代本の二代后にあたる部分には、賢聖の障子や清涼殿の画図の障子等が記されている。賢聖の障子は、二条天皇を諫める意味がありそうな使われ方だが、そうすると、第一類本『平治物語』で信西入道が絵巻で後白河上皇を諫めたことに通じようか。

## 十

筆者は右に、『今昔物語集』から所謂前期軍記までの武装・工芸・絵画等

いて、これも多様になっている。僧兵の永覚の、「萌黄綴ノ腹巻ニ黒革ノ鎧ヲ重テ」着けたというのものもある。又、家貞は木賊の狩衣の下に腹巻を着けて示威し、清盛は素絹の衣の上に纏って体裁を膳っている。

甲では、永覚の「帽子甲ニ五枚甲ノ緒ヲシメ」以外には、具体的記述が無い。

打ち物では、長刀を振って戦っているのが目に付く。僧兵が白柄の長刀を手に行っているのは、第一類本『平治物語』にも出ていたが、屋代本では、長刀や大太刀で実際に戦っている。中でも、永覚は「大太刀、長刀、左右二持」って戦ったという。二刀といえば、十郎藏人行家も左右に太刀を持って、常陸房達と戦っている。この行家捕縛の場面や剣巻では、太刀の長さ(注九)が二尺五寸、二尺七寸、四尺余と数字を使って示されている。刀の細工は、金・銀作りの外、赤銅作り、足白が出ている。清盛が「ヒシリツカノ刀ヲサシ」、銀の蛭巻した手鉾を脇挟んでいる姿もある。この手鉾は厳島大明神から授けられたとのことだが、法住寺殿合戦で神憑りした鼓判官知康は金剛鈴と鉾とを左右に持っている。変わったものに、木刀に銀薄を張って目を欺いたものもある。

弓は、山下宏明氏の指摘のように、那須与一の二所藤、教経のものと頼朝の贈り物の二つの重藤の外は塗籠藤となっている。(注一〇)

矢には塗籠と白籠とが出て来、矧いである羽は白・黒保呂・(大)中黒・切り斑・鵠・鶴の本白、薄切文に鷹羽と、これも多様である。壇の浦の合戦の遠矢には杏卷の上一束置いて、漆で名前を記してあるものも出て来る。

猶、安徳天皇が生まれた時は、「桑弓蓬矢ニテ天地四方ヲ射」たということである。

簾では、竹簾とか「山ウツホ」といった庶民的なものが出(第一類本『平治物語』にもある)、一方、大夫房覚明が簾から小硯・畳紙を取り出すところもある。

旗の色・注等では、源平の白赤の色の外、法住寺殿合戦では笠注に松の葉を着けたということも記されている。清盛が地獄に堕ちたという夢では、鉄札に無という文字が記されていたという。

滝口の花やかな容姿は「布衣ニ立烏帽子、衣文整イ髪ヲ撫テ」と描かれている。又、捕らえられた三位中将重衡への使者左衛門権佐定長は赤衣に剣笏を帯していた。それが重衡には冥官かと感じられたというのだが、定長の装いも冥官のそれに近いのだろう。一方、捕えられた成親を譴責する清盛は「素絹衣ノ短カウカ成ニ白キ大口フミク、ミ」と描かれている(油断した行家が小袖に大口でいた)。この清盛を諷める重盛は、一回目は「清ケナル布衣タヤカニ着成」し、二回目は「烏帽子直衣ニテ差貫ノ喬ヲ取テノトヤカニ」登場する。ところで、法住寺殿合戦で衣裳を剥ぎ取られた刑部卿三位頼輔は「衣ヲウツヲニホウカフテ 白衣ナル法師ヲ共ニ具テ」、帰って行くが、第一類本『平治物語』の描く信頼を思わせる。外に、宮門を守る者は「緑衣監使」と表現されている。

女性の最も王朝的装いは、扇の的を用意した女性の「赤キ袴ニ柳五衣着タル」である。対して、再入内した時の大宮多子は「殊更色有ル御衣ヲハ

後白河上皇・二条天皇を幽閉した後は、「小袖に赤大口、冠に巾子紙入て」「ひとへに天子の御ふるまひの如」き有様であった。この延長線上に前記の美麗なる武装がある。ところが、合戦が始まった途端、顔色は「草の葉のごとく」なり、落馬して「顔に沙ひしと付て、鼻の先つきかき、血あけにながれて」と、目も当てられない顔が大映しにされる。そして、敗戦後は、法師達に「赤地の錦の直垂、練貫の小袖三着たりしを二、精好の大口まではぎとられて、大白衣にぞ成にける」となり、「頸はとられて、むくろのうつぶさまに伏たる上に、すなご蹴かけられて、折ふし村雨のふりかゝりたれば、背みぞにたまれる水、血まじりて紅をながせり」という光景まで描かれて終わるのである。<sup>(注八)</sup> 彼程ではないが、合戦前の姿と捕らわれの姿が描かれる人物に、外に成親がいる。

捕らえられた時の頼朝の「布の小袖、紺の直垂」は庶民の子供の服装であるが、「柿の直垂着て」「平足駄はき鹿杖」ついた、零落した老人の姿も描かれている。第一類本は、このように驕奢なる衣装と貧窮した衣装などを対照的に使っているようにも見える。このこと等とも関係があると思うが、『平治物語』には変装が多い。女房を装って脱出する二条天皇、雑色や牛飼の装束を羽織って警護した清盛の郎等、雑色を装って光頼の伴をした右馬允範義と、いずれも緊張した場面となっている。

『平治物語』には信西入道が長恨歌絵巻を作成して後白河上皇を諫めようとしたという有名な記事がある。信西一家には三節に記した、後三年合戦絵巻を手配した静賢法印もいる。第一類本には首のない信頼の死体が描

写されていたり、一方、鎌倉時代後期の成立と見做されている『平治物語絵巻』が伝えられていたり、信西周辺、『平治物語』周辺は絵について絡まる面があるようだ。

## 九

『平家物語』は、取り敢えず屋代本で見て行くことにする。

武装を描いて行く順に『保元物語』・『平治物語』と特に異なる点はないが、矢・弓の次ぎに「冑ヲ脱テ 高紐ニ懸ケ」と出て来る時がある。半井本『保元物語』でも、為朝の追手を逃れた正清が、義朝の前にこの姿で弓を脇挟んで参上しているが、この表現を入れて武装を列挙した例はない。

直垂の色・柄は、『保元物語』・『平治物語』でも幾種類か出ていたが、屋代本では鎧の下の方・錦・麴塵・木蘭地・褐（「赤地錦ニテ鰭袖イロヘタル」というのもある）・柿・滋目結、上衣の赤・白・絹村滋・藍摺・紺・二重織物と随分多様である。上衣に直垂を着ているのが、少年や囚人なのは『平治物語』とはほぼ一致している。明経道の博士親済は、薄青の狩衣の上に萌黄色の腹巻を着けていて、討たれたが、「明経道博士甲冑ヲヨロウ事不可然」と非難されたという。一方、他軍記にない船軍で、能登守教経は「船軍ハ様有物ソ」と言つて「態直垂ハ着給ハス 巻染小袖ニ黒糸威鎧着」て戦ったとする。

鎧や腹巻の色・材料も、『保元物語』・『平治物語』に出てくるものの外に、伏縄目、「小桜ヲ黄ニ返シタル」・鎖（腹巻）・鷲威・洗革というものが出て

体にわたる描写となっていたが、第一類本では、大内裏に陣取って合戦を待つ右衛門督信頼・越後中将成親や義朝、待賢門で悪源太義平と騎馬戦を演じる左衛門佐重盛、六波羅の警護に立つ清盛と三場面、主要人物の殆どに人馬全体にわたる詳しい描写がある。従って、慈光寺本『承久記』、半井本『保元物語』に比べて華やかであるが、意外なのは重盛の相手である義平の武装描写がないことである。義平は、『平治物語』の英雄ではあるが、父義朝との釣り合い等から描き様がなかったということであろうか（為朝の武装・武具等に詳しくあった半井本『保元物語』と対照的である）。

直垂に始まる武装を描いて行く順は、半井本『保元物語』に等しい。

直垂では、信頼・成親・義朝・重盛・平賀四郎義信と、後日譚に出てくる義経が錦の直垂を着けている。大庭野の頼朝の許に駆け付けた義経に対して頼朝が「何者ぞ。さうなく錦の直垂着、白旗のさしやう、心えず」と咎めているように錦は特別な色であり、第一類本では、他に鬚切という太刀や理趣経を入れる袋の色としても出てくる。従って、錦が多く出て来て華やかだが、武装では、「おとなしやか」な色として対照的に黒が清盛達に用いられている。

鎧では、裾濃や匂といった濃淡の変化のある色が目につく。半井本『保元物語』でも伊藤六という十七歳の若武者が萌黄匂を着けていたが、第一類本では、同じ年齢の義信の外に、二十二歳の重盛が櫛の匂、二十四歳の成親が萌黄匂、二十七歳の信頼が紫裾濃、後日譚で二十三歳の義経が紅裾濃と、二十代の主将格の人物にまで広がっている。

清盛の黒ずくめの武装は『愚管抄』に記されていたが、第一類本はその甲を「冑ばかりは、銀をもつて大鍬形をうちたりければ、白く耀て人にかはり」と描いて、白黒の対照を打ち出している。このような点から、第一類本も、色彩に気を配って描いていると見られるのである。

太刀では、信頼から義朝に贈られた「いかものづくりの太刀」と、左衛門督光頼が参内した時の蒔絵の細太刀が対照的である。僧兵は長刀を武器としていて、「左右の小手さして長刀持たる」と描かれたりしている。又、鎌田兵衛の下部には熊手を持った者もいて、三河守頼盛の甲に引き掛けて、馬から落とそうとする（屋代本『平家物語』の義経の弓流しの場面に似ている）。

弓矢に関するものでは、葬送帰りの一団の武者が矢を入れている竹尻籠、平賀四郎義信の「うす紅の幌」が、本稿で初めてのものである（竹尻籠は、屋代本『平家物語』で、妹尾太郎兼康の下に集まった者達の矢入れに類しよう）。

『平治物語』の合戦では騎馬戦が中心になっている（『保元物語』は弓箭の腕が中心と言えよう）と思うが、その騎馬武者は、鎧の色と馬の毛色とで紹介されている。中では、義平が、「櫛の匂ひの鎧きて、鶴毛なる馬にのりたるは、平氏嫡く、こんにちの大將左衛門佐重盛ぞ」と指示して、一団となって、重盛を追い廻す場面が、特に印象に残る。この時、手前の義平の武装描写が無いので、重盛の鎧と馬の色だけが浮かび上がる。

義平と対照的に、信頼は衣装等の変化が詳しく示されている。

八角ヲゾシタリケル。カネ巻ニ漆一ハケ、夜部指タルガ、能モ乾ヌニ、手前六寸、口六寸、ナイバ八寸、大カリマタヲネズゲテ、ミネニモ能程ハヲゾ付タリケレバ、小キ手鉾ヲ二打違ヘタルガ様ナル物也ケリ。鎧で武者を射たことや剛弓振りが有名だったからであろうが、或いは重複なのかも知れない。矢には他に伊藤六、是行を次つぎと射抜いた前細がある。為朝の弓も「八尺五寸」とその長さが示され、別の箇所では、その太さを「ナガ持ノ杓ノ如シ」と形容している。（『今昔物語集』の維茂も「手太キ弓」を持っていた）。

馬も、為朝の乗馬は色・丈ばかりでなく、「ハヅンデ、太クタクマシクシテ、尾髪極テタクサンナルニ」と体型や動きまで示されている。鞍の色・飾りもいろいろと出て来るが、是行を射抜いた矢がその体を担うところでは前輪・尻輪が大写しにされている。騎馬が並んだ姿としては、宇野七郎親治の「ヒタ甲十四五騎」が「轡ミヲ並テ」駆け込むという場面があり、「ヒタ甲」という言葉も使われている。

猶、為朝はその体格も「其長七尺バカリ也。生付タル弓取ナレバ、矢ツカ、ユデノカキナ四寸マサリテ長シ」と数字を使って示されている。

又、捕らえられた時の姿は「白水干袴ニ赤帷ヲゾ着タリケル」と、鮮やかな配色である。

右の水干袴に腹巻を着けた例もある。これは左京大夫教長・近江中将成雅が「タ、カワンニハアラズ、ナガレ矢ノヲソレノ為」に着けたものという。この時、左大臣頼長は「白綿ノ狩衣ニ糸火威ノ鎧」を着けていた。上

皇方の中心人物は鎧や腹巻の下は水干袴や狩衣袴である。腹巻は、徒歩の武者が多く着けている。

作戦会議に臨んだ義朝は「赤地ノ錦ノ直垂ニ烏帽子引立テ、脇立計ニ太刀ハキテ、弓脇ニハサンデ」と描かれている。貴族の前には、このような姿で出たのであろう。

半井本では、涙がどっと流れている場面を、

（為義の）コキ墨染ノ衣ノ袖、流ル、涙ニ洗ハレテ、ウス墨染ニヤ成ヌラン

波多野次郎義通ガ赤革威ノ鎧ノ袖ハ洗革ニヤ成ヌラン

のように表現している。これは、色の着きが、余り良くなかったことを語ってみたいようか。

人馬の色彩以外で気付いたものに、「白楊ノ路モ何ヲ指テカ可尋。蒼梧ノ煙モ靡方ヲ不知」がある。「白」を含む漢語と「青（蒼）」を含む漢語とで対を作る方法は、前記の『六代勝事記』に見られたが、これなどはその手法に習ったものに違いない。猶、青白の対は、為朝が鬼島に気付く場面の、「アケボノ二見バ、青鷺、白鷺ニツレテ、東ヲ指テ飛」にも見られる。

## 八

『平治物語』では所謂古態本に完本がないので、新日本古典大系の本文（以下、第一類本と呼ぶ）によることとした。

半井本『保元物語』では山田是行と八郎為朝の騎馬描写が唯一の人馬全

シテ、長服輪ノ太刀ハキテ、山鳥ノ尾ノ藤ノ皮ニテハイダル矢廿四指タル、サキニ一ハ射タリケル、残り頭高二負成テ、節卷ノ弓ノ拳太ニテ、八尺五寸有ガ、誠ニツヨゲナルヲ以、白葦毛ノ馬ノ七寸ニハズンデ、太クタクマシクシテ、尾髪極テタクサンナルニ、全服輪ノ鞍置テゾ乗タリケル

描写の流れは、直垂・冑・甲・太刀・矢・弓・馬・鞍の順になっている。是行には直垂・太刀の説明がないが、他は同じ順である。これは前記『愚管抄』の清盛の描写順に殆ど等しい。

為朝と、作戦會議に出席した義朝の直垂は白・赤地の錦となつてい、信西は薄墨染である。色相には充分意識的だと言えよう。鎧の色彩の説明に半井本は、「午時計ナル」・「盛少過タル」という、『太平記』に見られる説明を加えている。又、為朝の鎧は、作戦會議の場では、「大荒目ノ鎧ノ白唐綾ヲ以テ綴タルニ、師子ノ丸ヲ裾金物ニゾ打タリケル」と、より詳しく描かれている。このように二回も詳しく鎧が描かれている人物は、他にない。鎧の各部を、為朝が「胸板カ、三ノ板、屈繼、障子ノ板カ、脇立、壺ノ余カ、弦走カ、一二ノ草摺カ」と挙げてゐる。この外に袖があり、又外に、臍当という具足も出て来る。甲については、義朝の「辰頭ニ鍔形打タル甲ノ星七八、カラリト射散シテ」という表現がある。義朝の甲の装飾の方が先の為朝のものより込んでいる。「御曹司ノ左ノ貌崎、半頭ノ間ヲ射弳リテ、甲ノ手崎ニシタ、カニ射付タリ」と顔の辺りの具足の細かな描写も出て来る。一方、是行には「居頸ニ着ナシテ」という、甲の被り方も付いている。

その他、「三枚甲」と綴の造りもあるし、「甲ノシコロヲ傾ケテ」突き進む姿も出て来る。太刀については、別の箇所にも、「ネリツバノ太刀ノ三尺五分ナルニ、熊ノ皮ノ尻ザヤ入テサゲハキタリ」という詳しいものがある。片切景重や山田是行の従者など、徒歩武者の場合は、長刀を手にして戦つてゐるように見える。

半井本には、『今昔物語集』や慈光寺本『承久記』には無い「頭高二負成」した姿が目につく。弓矢については当然のことながら為朝のものに詳しく、引用部でも「山鳥ノ尾ノ藤ノ皮ニテハイダル」と、その作りが具体的に記されている。ところが、このような説明も物の数ではない文章が二つも出て来る。

箭ニハ、三年竹ノ金色ナルヲ、アラヒミガ、バ、性ヨハリ成ルベシトテ、節バカリカキコソゲテ、木賊ニテミガヒタリ。羽ニハ、烏ヤ鶴、鴻、梟ノ羽ヲモ不嫌、拾集テ、藤ハギニマキ集メタリ。矢ノ尻ニハ、楯破、鳥舌ニモサキボソニスリミガキテ、油ヲゾサシタリケル。マチヲハ、篋中過テ入タリケル。矢筈コラヘネバ、角ヲツギテ朱ヲゾサシタリ。山鳥、鵠ノ霜降ハギ合タルニ、生朴ノ鶉ノ長八寸ノ目九サシタルニ、手六寸、ナヒバ八寸ノ大雁股ヲネズゲ、峰ニモ刃ヲ付タリケレバ、手鉾ヲ打チガエタルガ如シ。

鎧ハ朴ノ生木ヲ、一昨日切寄タルヲカキソイデ、手ニクレトテクラセタル。人ノ引目ト云ヨリモ、猶八寸長ク大ニ、目九サシテ、目柱ニ

林」「青葉」は漢語の白と緑(青)を対照させたものである。3の「青嵐」「翠黛」「紅顔」「蒼波」を見ると、忠隆は漢語に含まれる色彩を取り合わせて文を作ることが好んだようである。2と6は源氏の旗や更衣について述べた文である。

『六代勝事記』は、早く野村八良によって「詞藻絢爛を極むる」と評されたが、<sup>(注六)</sup>右に挙げたものはその一端を占めるものに違いない。しかし『六代勝事記』に出て来る色彩は、漢語の知識が織り上げたもので、本稿の『愚管抄』までに取り上げてきたものとは性質が異なる。

## 六

慈光寺本『承久記』(以下、慈光寺本と略する)は、『六代勝事記』の成立後二十年程の間に書き上げられたと見られている。<sup>(注七)</sup>この作品の武装描写として最も詳しいのは、伊賀判官光季・寿王父子の

寄懸ノ目結ノ小袖ニ、地白ノ帷、大口計ニテ、白鞘卷ヲサシ、十六サシタル胡籙・三要日サシタル胡籙ニ腰取寄テ、出居ノ妻戸ニ矢タバネトキテ立置、滋藤ノ弓三張ハリ立テ

小連銭ノ小袖ニ、地白帷、黄ナル大口、萌黄糸威ノ腹巻、錦革ノ小手ヲ差テ、七寸五分ノ腹巻透ヲ差シ、十六サシタル染羽ノ胡籙カキタテ、重藤ノ弓ノ本弰ウラハズシメテ、紅ノ扇開キ持、内柱ヲ木楯ニシテのところである。小袖・帷・大口で始まるのは、光季が鎧を着けなかった

からであろうか。小袖には柄、帷には地色が記されている。十四歳の寿王は、外に萌黄の腹巻・錦革の小手、紅の扇、染羽の胡籙、黄色の大口と、極めて色彩豊かに描き出されている。寿王の腹巻透には七寸五分という長さが記されているが、この長さの意味は何であろうか。光季父子は甲類を着けていないが、間野次郎左衛門は「ハツブリ計カケタル」姿であったという(顔を隠す為であろうか)。この半頭や寿王の扇とか染羽の矢とかいうものは、半井本『保元物語』にも出て来る。

この場面以外では、大井戸の戦いで、蜂屋三郎が、滋藤の弓で上差しを放ち、武田の郎等の胃の胸板を上巻まで射通したということと、彼が腹巻通しで武田六郎の「甲ノテヘン鎧ノワタガミマデコソカキ付タレ」というところに、部分的に武具・武装が描かれているだけである。

武装描写以外で色彩のある表現も、序の「利生ノ光、黄金ノ櫃キニ納給フ」という、仏教的想像の産物の外には無い。

慈光寺本は、承久の合戦を具体的に辿っているのであるが、武者の装束等を色彩等に言及して描く場面は、極めて少ないのである。

## 七

『保元物語』では、現在古態本と見做されている半井本で見て行きたい。

半井本で武装の描写が整っているのも、築紫八郎為朝と山田小三郎是行の弓矢合わせの場面だけである。次に、八郎為朝の騎馬描写を挙げる。

白地ノ錦ノ直垂ニ、唐綾威ノ胃ノ、午時計ナルニ、辰頭ノ甲キラメカ



『平治物語』・『平家物語』に関わるところから武装を中心に、色彩や工芸等を見てみよう。

『保元物語』に関するところでは、崇徳上皇方を攻めよという命を受け、た下野守義朝が、喜んで、「日イダシタリケル紅ノ扇」を使う場面一箇所だけである。本稿で初めて扇が出てきたのであるが、この扇の柄は『平家物語』に出て来る。

『平治物語』に関するところには四箇所程あるが、先ず清盛の「ヒタ黒」、「カチノ直垂ニ黒革オドシノ鎧ニヌリノ、矢オイテ、黒キ馬ニ乗テ」が注目される。「ヒタ〇」という言葉が本稿で出て来る最初ということになる。この後、清盛は大鍬形の甲を被つて、緒を締める。甲の装飾と付属品が記されるのも初めてであった。次に、宗盛が、湯浅宗重の十三歳の子の「紫革ノ小腹巻」を借りて、着けるところがある。ここには、子供の武装が記され、腹巻の大小、威の材料・色が示されている。更に、鎧の下の直垂の色に、清盛の例（前記）の外に、師仲が「アイズリノ直垂」を着ける場面がある。武装の外に、惟方が「直衣ニク、リアゲテ」参院したというところもある。袴の括りを上げている姿は『今昔物語集』に出ていた。

『平家物語』に関するところには二箇所ある。先ず、八条宮が衣・袈裟を脱いで「コンノカタビラ」に着替えていたという記事である。前記の師仲のように鎧直垂を着していたのではないかと考えるが、如何であらうか。もう一箇所は、上洛した時の頼朝の姿、「コムアラニノウチ水干ニ夏毛ノムカバキマコトニ白クテ、黒キ馬ニゾノリタリケル」である。「コムアラニノ

ウチ水干」、白い行騰、黒い馬と色彩豊かな出で立ちである。

義朝が扇を使ったことと清盛の「ヒタ黒」とは『保元物語』・『平治物語』に出て来るが、他は本稿の古態本では利用されていない。

## 五

貞応二（一二二三）年から翌三年の間に藤原忠隆によって纏められたかと考えられている『六代勝事記』<sup>（注五）</sup>には保元の乱から承久の変までの戦乱の世の歴史が記されているのであるが、武装を具体的に記した箇所はない。しかし、この作品には次のような色彩（を強調した）表現が出て来る。

- 1 いそへのつゝしの紅は そての露よりさくかとうたかひ
- 2 白鷺の遠松にむれるを見ても ゑひすはたをなひかすかとあやしみ
- 3 青嵐膚をやふりて 翠黛紅顔の粧やうやくおとろへ 蒼波眼うけて
- 4 二位家 西海の白波をたいらけ 奥州の緑林をなひかして後 錦のはかまをきて

- 5 叡心そむきし青葉は 風の前にちりはて 朝章をみたりし白波は うたかたときえにしかとも

- 6 大宮人はさくら色に染したもと おしなへて 卯月をまつにさきか、る藤の衣にたちかへき

- 7 漕行あとの白浪 嶋々浦 松のみとりをふきみたる 木の葉の風のくれなるも 御袖のしくれよりやとあやしくて

- 1と7は「紅涙」に結び付けて心情化したものであり、4と5の「白波」「緑

(注三)  
るが、「首の無い骸の累々たるさま」は、掃守の在上のような絵師の手によって描かれたか、と考えられる。

## 二

承安二(一一七二)年秋以降に寂超(藤原為経)によって記されたと見做されている『今鏡』には、大内記慶滋保胤が具平親王に答えて、紀育名、大江以言、同匡衡の詩を比喻で評した中に、

匡衡がやうは、武士の朱の革して緋緘とかしたるきて、えならぬ駒の足疾きに乗りて、逢坂の関を越ゆるけしきなり

という言葉がある。逢坂の関を駆けて越える騎馬武者の姿で、匡衡の詩を譬えているのであるが、ここには、武者の鎧の威の材料と色とが示されている。この保胤の返事は、建長六(一二五四)年に橘成季によって纏められた『古今著聞集』巻第四「文学第五」では

敢死之士數百騎、被介冑、策驍驍、以過淡津之濱、其鋒森然少敢當者となつてゐる。粟津の浜を進む騎馬軍団に変わってしまったところが面白い。こちらでは、馬が驍驍(赤馬)と説明されているが、甲冑の色等の説明は無い。

『今鏡』には、もう一つ宰相中将信通について、「白河院の、殿上人に武者の装束せさせて御覧じけるに、滋目結の水干きて、胡籙負ひ給へりけるこそ、品すぐれておはしけるにや」という文のあることが指摘されている。(注四)

「この君こそあるじなどいはむやうにおはしける」と評されたというのだが、

ここには水干の模様(の出し方)が示されている。  
『今鏡』になると、武装の氣品といったものが、味わわれている時代を感じる。

## 三

既に先学の注目しているところであるが、吉田経房の日記、『吉記』承安四(一一七四)年三月十七日条に、

拾遺來臨 爲見申繪所招引也 件繪 義家朝臣爲陸奥守之時 與彼國住人武衡家衡等合戰繪也 件事雖有傳言 委不記又不畫 靜賢法印先年奉院宣 始令畫進也 彼法印借出御倉送之 爲消徒然歟

という記事がある。これによると、後三年合戦は承安元年(「康富記」による)まで「雖有傳言 委不記又不畫」とのことであるが、前記『今昔物語集』巻第二十五には「源義家朝臣罰清原武衡等語 第十四」という見出し(本文無し)があった。勘案すると、『今昔物語集』が説話化に挫折したまま長く放置されていたらしいが、後三年役終結後九十年経った時点で、絵巻物という形で、初めて纏められたようである。後白河上皇の御声懸かりだったから材料が集まったのであろうと考えるが、それにしても後三年役の絵巻を作ることになった動機は何だったのであろうか。

## 四

承久二(一二二〇)年に慈円によって記された『愚管抄』の『保元物語』・

右の外、被り物・着物等の品、作りやその表現を挙げて行くと、被り物には女性の市女笠が出て来る。これは、維茂が大君の娘に恥をかかせないように被らせたものである。沓では、卷第二十三「左衛門尉平致経、送明尊僧正語 第十四」に藁沓が出て来る。致経はこの藁沓の上に沓を履いて、馬に乗る。

袴の柄は外に記されていないが、「扶ヲ上ゲ、喬ヲ交シ」ている姿が卷第二十三「駿河前司橘季通、構逃語 第十六」にある。又、卷第二十五「藤原保昌朝臣、値盗人袴垂語 第七」には指貫の「喬校」んでいる姿が描かれている。この説話中の保昌は「狩衣メキテナヨ、カナル」衣を着けていた。

矢を射る時、「紐差乍ラ、表衣ノ袖ヲマクリ、弓頭ヲ少シ臥セテ」慕目を射る様が卷第二十五「春宮大進源頼光朝臣、射狐語 第六」にある。二十人の軍兵の弓が「朝日ニ鏑メキテ見へ」というのも卷第二十五「源頼信朝臣、責平忠恒語 第九」にある。この「鏑メキテ」は心理的な威圧感を伴うもののようで、卷第二十五「平維茂郎等、被煞語 第四」には「年五十余計ノ男ノ、大キニ太リテ鬚長ク、鏑ク怖シ氣也」という表現もある。ここでは、人物を描くのに、その年齢・体型・顔の特徴（鬚）・雰囲気（鬚）を挙げている。人の姿としては、外に、維茂が「女人ノ着タル襖」を着、「髪ヲ乱テ、下女ノ様ヲ造」って逃れるところがある。やはり、着衣と頭髪の形が男女を見分ける主要な材料であったようだ。

乗馬姿に関わるものから既に大君の妹が市女笠を被ったこと、致経が藁

沓の上に沓を履いて乗ったことを挙げたが、卷第二十五「藤原親孝子、為盗人被捕質 依頼信言免語 第十一」には、「草薙馬ノ中ニ強カラム馬ニ賤ノ鞍置」き「賤ノ様ナル弓・胡籙」を身に帯び、干飯の入った袋を腰に結び付けて去ろうとする強盗も描かれている。

ところで、卷第二十五「藤原純友、依海賊被誅語 第二」には、

左衛門ノ府生掃守ノ在上ト云高名ノ繪師有リ、物ノ形ヲ写ス、少モ違フ事无カリケリ。其レヲ内裏ニ召テ、「彼純友并ニ重太丸ガ二ノ頭、右近ノ馬場ニ有リ。速ニ其ノ所ニ罷テ、彼ノ二ノ頭ノ形ヲ見テ、写テ可持参シ」ト。此レハ彼ノ頭ヲ公ケ御覽ゼムト思食ケルニ、内裏ニ可持入キニ非バ、此ク繪師ヲ遣ハシテ、其形ヲ写シテ御覽ゼムガ為也ケリ。然テ繪師、右近ノ馬場ニ行テ、其ノ形ヲ見テ写テ内裏ニ持参リタリケレバ、公、殿上ニシテ此ヲ御覽ジケリ。頭ノ形ヲ写タルニ少モ違フ事无カリケリ。此ヲ写テ御覽ズル事ヲバ世人ナム承リ不申ケル。

という部分がある。ここでは、掃守の在上という写し絵の名人が、天皇の命で藤原純友父子の首を写して、献上したと言っている。繪師がこのような仕事で兵乱（の結末）に関わることもあったのである。現存する『後三年合戦絵巻』について、桜井清香氏は、「柵中から逃れ出たる婦人を斬った段、俯向に婦人は倒れて、ふくよかに肥えてゐる首、丈なす黒髪と共にころりと胴から離れた顔が見える、如何にも哀れで、そろり無感情が浮ぶ。」「此の巻が然く残忍性の表現されてゐることは他に類の少ないもので或は時代の然らしむる所かも知れない。」などと、「残忍性の表現」を指摘されてい

# 軍記物語等の武装・工芸・絵画等、及び、その色彩表現

橋 口 晋 作

所謂武装描写の考察は、近年の服部幸造氏「軍記物語の武装表現（序）」<sup>（注一）</sup>に至るまでに、その対象を『古事記』・『日本書紀』から『太平記』・『増鏡』にまで拡張、その武装の内容の考察も多面的になって来ている。

筆者は、近年、所謂前期軍記『保元物語』・『平治物語』・『平家物語』・『承久記』の成立をめぐる問題について考察を続けているが、本稿も、そのような問題意識を根底にしなが、『今昔物語集』から所謂前期軍記に至るまでの作品（の軍記的部分）について、色彩や工芸的側面を軸に武装等を辿ってみるものである。

## 一

『今昔物語集』では、巻第二十五「平維茂、討藤原諸任語 第五」の維茂の、

我ハ紺ノ襖ニ歎冬ノ衣ヲ着テ、夏毛ノ行騰ニ履、綾蘭笠ヲ著テ、征箭卅許、上指鴈膀ニ亦指タル胡籙ヲ負テ、手太キ弓ノ革所々巻タルヲ持テ、打出ノ太刀帯テ、腹葦毛ナル馬ノ長七寸許ニテ打ハヘ長キガ、極タル一物ノ進退ナルニ乗テ

という出で立ちの描写が注目されている。<sup>（注二）</sup>ここでは、維茂の馬上の装いと彼の乗馬が具体的に説明されている。その維茂の装いは、襖・衣・行騰・笠などの身に着けているものと胡籙・弓・太刀などの武具とで描かれる。そして、襖と衣には色彩の説明が、行騰には毛の説明が、そして笠には材料の説明がそれぞれ付いている。又、胡籙には征箭と上指の雁股の数が、弓と太刀には造りがそれぞれ加えられている。一方、馬には毛色・丈・力の説明が加えられている。これは、『今昔物語集』巻二十三、二十五の武士説話の中では最も詳しい装いの描写である。

さて、右に紹介した維茂の着衣を意識して描かれているかと思われるのが、巻第二十三「陸奥前司橘則光、切煞人語 第十五」で、則光の切り殺した者を、あたかも自分が倒したかのように振る舞っている人物である。この男も紺の襖に歎冬の衣を着ているのだが、彼は、維茂の衣装を真似て（同時代人かと見られる）維茂と同じ位の武士を演じているように思われる（前に配置されているが）。強い武人を演じているだけに、こちらには、更に「洗澡」「袷ト吉ク被曝タル」という説明が加えられていて、維茂よりパリッとした衣装になっている。そういえば、この男の太刀には尻鞆が付いてい、その尻鞆が「猪ノ逆頬」で作られていることも説明されていた。袴には柄が、沓には材料が記されている。いずれも、立派な身形から維茂のような優れた武人と見せる為の代物に外ならない。

右のように『今昔物語集』には、他の説話の登場人物の真似をしている（を意識して描かれている）らしい人物も出て来る。